

東京歌会（第六十七回）

平成三十年五月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者  
五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

新緑の光りに窓を開け放つ風向きかわりカーテンおどる

市川茂子

明るい、すがすがしい、いかにもな五月の光。瞬間の風のふるまい。いずれにしてもおどる  
ようにカーテンがゆれたのだ。明快。

咲きさかり襤褸きわめて紅つばき卯月尽日つい（終）の花散る

林 博子

すでに花散って、それが木下に襤褸らんるをきわめている状態か。咲くという行為のその最終段階、  
下句は、やや劇的にそこをみている。卯月尽日も強調。

ユリノキの花は初めてと云う人はカメラもつ女性平成館出て

小野澤繁雄

平成館は上野の国立博物館にある。博物館本館の正面ロータリー状の空間の真中にユリノキ

の巨木がある。花はやや独特で、ユリノキが少ないから花をみることも少ない。女性は、めざ  
といのだ。

カモメ飛ぶ酒田の海へ散骨のためにわれらは集まりて来ぬ

布宮慈子

同人だった鈴木京子さん、そのパートナーの哲さんの散骨に集まりがあった。酒田港から、  
プレジャーボートで出たことが同出の歌にある。散骨のためにわれらはつどい来ぬ、としてこ  
れを上句にもつてくるような案も出された。

花咲くは難しと思ふもアマリリス蕾折れしをテープに補ふ

丸山弘子

難かたしと思（も）ふも、を、難しと思（おも）ふ、といい切ってしまう案も議論したが、この  
ままでよいということになった。結果は、咲いたということである。

東京歌会（第六十八回）

六月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首八首。出席者四名（市  
川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

雨降れば陽の光り欲しと時待てずあらがいながら独りごと言う

市川茂子

全体に修辭に重なり感がある。時待てず、を外して、今の季節の歌として、ここをたとえば、長雨に、とし、あらがいながら、が何を受けているのか、ハッキリさせたらよいかもかもしれない、と。ことしの梅雨の感じが出ている。

日常にテレビのなくて穏やかな六月ワールドカップ始まる

布宮慈子

上旬、テレビ視聴が生活のなかで習慣化されていないというくらいのことか。穏やかな、でいったん切る。歌会当日はもうサッカーワールドカップは始まっているところ。作者は、穏やかさを壊して、ワールドカップはみようとす。そんな氣息だろうか。

ここにきてみるアジサイにアナベルはホームセンター花売り場でもみる

小野澤繁雄

ここにきて、は場所でなく時間の経緯を云っている。アジサイの中で種類アナベルは、とつながら、一読では読みにくい。アナベルは白い花で、これは終始白い。見かけ始めると、みることが多いという。アナベルはしらないという人もいる。

広島より母失ひて小田原へ来し友それを語らざりけり

中川禮子

この歌会で既出だが、おおよそ解釈に困るところはない。ただ、初句の、広島より、の、より、

に疑問がある。広島より、は小田原へ、が受けているが、母失ひて、は広島だろうかから、初句、広島に、が提案された。どうだろうか。それを、のそれもそれで説明される。

### 東京歌会（第六十九回）

七月十九日（木）、会場：文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二百十首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

真夏日を部屋に涼みて遠く近く街の騒音たえまなく聞こゆ

市川茂子

真夏日は、一日の最高気温が30度以上の日を云う。部屋に涼みて、が、ある意思をみせているところ。街の騒音を避けたようなところながら、それを聞くことになってしまっているという。七音、たえまなく聞く、でいい。

正確なバスを出だししクロアチアのルカ・モドリッチMVPなる

布宮慈子

正確なパス出しで作者の印象に残った。ルカ・モドリッチとフルで云う。クロアチアは準優勝に終わり、失意のMVPと云われた。二句はやや読みにくい。パス出しをする、でもいい。大会を通して、そうだった。

朝の間は人の姿のなきごとき園に集いてポケモンGOの人ら

小野澤繁雄

人を見かけることのないような小公園に朝のうちから人が集まっていたら、さいきはこれである。大人から子どもまで。手にはスマホをもつ。ポケモンGO（ゲーム）で遊ぶ人ら。

かの世にて会を開けばこの世より多くの友の笑みに逢はむか

中川禮子

友は、学校の同級生であるような友。同年齢の多くがすでに亡いような年齢の作者像がある。会を開けば、は何か集まり。表現はやわらかい。（友の）笑みとしたところ、がいい。

むかごより育ちて咲きし黄金百合ひと本なれどめぐり華やぐ

丸山弘子

むかごというと、普通には山芋の肉芽のこと。それで、入りにくいという。黄金百合（おうごんゆり）は、黄金鬼百合として知られているものか。ひと本でも花はめだつ。上句に眼目がある。

崩れゆく氷の音す水滴の付きしコップのパインカルピス

林 博子

氷がとけると、コップのなかの所在はうごく。それが音になるが、三、四句、パインカルピスでより感覚的ところが強調された。

（報告…小野澤繁雄）